

新聞で読む『満韓ところどころ』

鈴木裕人

1

何人かで漱石の『満韓ところどころ』を読んだ時、筋が分かり難いという感想が大半であった。しかし、この中の一人が、各章ごとに区切って、それぞれにタイトルをつけながら読むと意外にいける、と言う。曰く、一〓満鉄訪問の延期、二〓是公↓総裁、三〓ぶつかる船、……。全編を一絡げにして読んでいた者にとつては、まるで海が割れたように世界が開け、多少の違和感が残るものの、これは長編ではなく短篇の集積として読むべきだとたちまち宗旨替えをした。

この時用いたのは岩波文庫の『漱石紀行文集』（藤井淑禎編、二〇一六年）であった。現在のところ、最も入手しやすい『満韓ところどころ』のテキストは、この岩波文庫版であろう。漱石作品ならば文庫版が容易に入手できるかと思いきや、意外にも『満韓ところどころ』の文庫本は少ない。新潮文庫・角川文庫には収録がなく、『満韓ところどころ』が標題となったものを探すと、おそらく一九三二（昭和7）年の春陽堂文庫まで遡らなければならない。岩波文庫のほかには岩波書店や集英社などから出ている個人全集に収録されたものか、国立国会図書館のデジタルコレクションに収められた『四篇』（春陽堂、一九一〇年）がある。春陽堂は一九一五（大正4）年にはば新書大の単行本『満韓ところどころ』を出している。もつ

とも読むことのみを目指すのならば青空文庫でも可能。千円札の肖像の座は明け渡したものの、大げさに言えば、依然として日本近代文学の顔である漱石の何種類もの全集は日本全国の図書館に完備され、容易に読むことはできるのだ。

ところで、以前『滿韓ところどころ』を読んだ時のことを思い返すと、作品を長編と思い込んだ原因は、各章が連続する頁の中で、前章に続く形で前章との間を置かず配置されていたことにあるのではないか。書物としてのテキストに対してこのような苦言を呈するのはおかしいのだが、『滿韓ところどころ』の初出は『朝日新聞』（東京・大阪）で、先の各章が一日一篇読切りのかたちで発表されたことを忘れてはならない。

数ある漱石の全集中で、初出時に遡って読むという目的に最も合致したテキストは、ゆまに書房が出した『漱石新聞小説全集』（全十一巻、一九九九年）である。同社HPでは、この全集の特色として、「●漱石が読者にもっとも提供したかった本文として、多くの研究者・愛好家に日常的に鑑賞され、引用に供される初の新聞小説全集」などと謳われたほか、カタログに掲載された監修者の山下浩の「監修のことば——なぜ今『漱石新聞小説復刻全集』なのか」も再掲されている。山下は、一九九三年から刊行された岩波書店の新しい『漱石全集』の校訂に苦言を呈し、自身の監修する全集の方針を次のように打ち出した。

漱石愛読者間にこのような全集本文が普及するのは由々しきことであり、それゆえ当復刻全集は、この本文に代わべく、当時の「東京版朝日新聞の読者に提供された本文」という単純明快なコンセプトの本文を提供することにした。

このような方針のもとで、全集の本文は、「各機関に現存する原紙を詳細に調査し、最も保存状態のよいものを直接撮影」して、いわゆる影印本がつくられた。ただし、「●朝日新聞に掲載された漱石作品のうち、『虞美人草』から『明暗』まで、長編小説のすべてと、いわゆる小品類を収録した。著者による予告など関連資料ももれなく収録した」という本全集に、『満

韓ところどころ』は採られなかった。「長編小説」でも「小品」でもないという判断によるものだ。

今回は『東京朝日新聞』に掲載された『満韓ところどころ』をテキストとし、閲覧には『朝日新聞』のデジタル版である「聞蔵Ⅱビジュアル」を用いることとした。『満韓ところどころ』は、全体としての一貫した筋よりも新聞掲載当日の話題性が優先・重視されたテキストであると考えられるからだ。仮に『漱石新聞小説全集』で読むことが可能であったとしても、新聞から漱石だけを切り抜いたテキストでは、他の記事との相互参照によって浮かび上がるテキストの魅力が抜け落ちてしまったことだろう。結果的に『漱石新聞小説全集』に収録されなかったことが幸いしたのである。

2

『満韓ところどころ』は、一九〇九（明治42）年十月二十一日から十二月三十日まで、『東京朝日新聞』朝刊の三面に発表され、休載を挟みながら五十一回で終了した（『大阪朝日新聞』では、十月二十二日から十二月二十九日まで）。表題は「満韓ところ／＼」もしくは「満韓ところ／＼」と表記され、署名は「漱石」。各回は「（一）」のように示されている。本文は紙面同様に総ルビで、挿絵やカットはない。

漱石が本作を執筆した経緯は、「二」（10月21日）で述べられている。漱石は、旧友で南満州鉄道株式会社総裁の是公（中村是公）^{よしこ}に招待されて同年九月に旧満州・韓国に出掛けた。この時の旅行に取材し、弥次喜多味のある紀行文として書かれたのが『満韓ところどころ』である。「一」によると、是公については「二十四五年前、神田の小川亭の前にあつた怪しげな天麩羅へ連れて行つて呉れて以来時々連れてつて遣らうかを余に向つて繰返す癖がある」と諧謔を弄した紹介がなされているが、漱石の妻・鏡子の目には少し違って映っていた。

元々この満洲行きには、中村さんがたゞ、まだ見ない土地に御自分の旧友を連れて行つて、いろ／＼な風物を見せてやらうといふ思召しだったのでせうが、其外に自然当時は人がよく知らない満鉄の事業や何かの紹介をやらせようといふことでもあつたものと見えます。しかし自分では別に提灯持ちをする気はなかつたでありませう。²⁾

南満洲鉄道株式会社（満鉄）の発足は一九〇六（明治39）年六月。日露戦争の戦果として得た当地の鉄道経営権を基に勅令をもつて成立した株式会社である。創設時には満鉄株の人気は高く応募が殺到したのだが、満洲・満鉄に対する一般の評価は概して低かつた。

のちに満鉄東京支社長になる入江正太郎の回想によると、明治四四年に東京帝大を卒業し満鉄に入社したものの、当時満洲へ渡つたり満鉄に入社することなど「余程の変り者」か「突飛な野望家」の考えることで、親戚や友人も「満洲落」だといつて思いとどまらせようとしたという（入江正太郎『一枚の屋根瓦』）。入江の入社は漱石の満洲旅行よりも二年後のことだが、漱石を驚かすほどの満洲の発展ぶりが次第に伝わつていたこの時期ですら「満鉄」や「満洲」といったイメージは日本人にとつて身近なものではなく、むしろ危なっかしい印象しか与えていなかったのだ。³⁾

右のような状況ゆえ、「当時満鉄は、その事業内容を内外に広く宣伝することに努めていた。満鉄の広報宣伝活動は創立当初から活発で、国内企業のその水準をはるかに抜いていた」と指摘する原田勝正⁴⁾は、「中村総裁が漱石を招いたのも、たんに友人を招待するという目的ではなく、漱石の筆を通じて満鉄の事業を宣伝させるといふ目的があつたからであろう」と鏡子の回想をなぞる認識を示している。また、猪狩誠也「広報の誕生」⁵⁾では、満鉄の広報能力を次のように紹介している。

〔…〕後藤〔新平〕は〔満鉄総裁〕就任後すぐ〔19〕07年4月に調査部を設け、政策には現状の調査が大事であることを認識し、それを実行に移している。これが外へむけての情報発信を重視することにつながる。なお、当時の主要な日本企業で、調査部を持っていたのは、1898年に設置した三井物産だけであった。

満鉄は、存在することがいかに正當かを社内外に知らしめることなしには、存在できない企業でもあった。したがって「調査」や「弘報」が重要であることを内外に示さなければならなかったし、後藤は情報の大切なことをよく認識して、そういう人びとの活躍する舞台を準備したのである。

引用部の後で、漱石を呼び寄せたことを「名士招待」として分類しているが、当時刊行された鉄道旅行案内も、満鉄が力を入れた広（弘）報事業の一つの表れと見ることができよう。

荒山正彦「近代日本における旅行と旅行案内書」⁶⁾によると、官製の鉄道旅行案内は、一九〇六（明治39）年に発布された鉄道国有法の前年に出た『鉄道作業局線路案内 東海道線北陸線及中央線』が嚆矢で、一九〇八（明治41）年に鉄道院と鉄道管理局が設置された後に、鉄道院が所管する鉄道線路を案内する『鉄道院線道遊覧地案内』や『鉄道旅行案内』が出版され、流行する。以上が「内地」であるが、「満洲における鉄道旅行案内書の出版も、明治42（1909）年からスタート」と「外地」においても時を同じくして出版を開始し、満洲・満鉄案内の機を逃さない。爾来「満洲の鉄道旅行案内書は、南満洲鉄道によって少なくとも昭和10（1935）年まで出版された」という。

では、その『南満洲鉄道案内』（南満洲鉄道株式会社、一九〇九年十二月）で提案された観光ルートをみてみよう。

若し夫れ沿道各地の観光を行はんか、先づ大連より旅順に至りて要塞激戦の跡を偲び、南山に登りて奥軍勇士の魂を弔し、貔子窩、複洲に天日製塩所事業を見、熊岳城及湯崗子の温泉に旅塵を洗ひ、千山に攀ちて神斧鬼工の奇勝、唐碑、

寺観の古雅を探り、営口に商業及交通運輸の状勢、遼河流域の南満洲に貢献する利便を察し、遼陽奉天に古来治乱興亡の跡を鑑み、撫順支線に入りては豊富なる炭層、明の撫順城址を訪ね、安奉支線に至りては〔…〕

巻頭には「南満洲鉄道線路図」が綴じられているので地名を追うことができる。当時の満洲は、日露戦争のポーツマス条約（一九〇五年九月五日調印）によって得た新たな領土であった。荒山が、「満洲の旅行案内書には、〔…〕いわゆる「戦跡ツアーリズム」の記述や図版が少なくなる^⑦」と指摘したように、多くの日本人にとっての観光とは、まだ記憶に新しい戦争遺跡や勝ち得た名勝、また帝国の新興ぶりを目にするこゝとなのであり、戦争の成果を見て周るコースが自ずと出来上がる。そのコースが鉄路を行くものであることはいままでもない。

地名に注意して見れば、漱石の旅行が右に提案されたコースをなぞっていることに気付くはずだ。小宮豊隆^⑧によれば、このコースは新しい帝国の姿を伝えるのに適していたのであるから、満鉄が漱石に期待した役割も自ずと理解される。

〔…〕実際漱石は満洲で見るべきものをしつかり見て来てゐるのである。例へば大連の市街、旅順の新市街、二百三高地、熊岳城、熊岳城から梨畑を見に行く途中、梨畑の主人の家、熊岳城から営口へ行く途中、汽車から降りて湯岡子の宿屋へ行く途中、奉天の北稜などの描写を見ても、それが分かる。

後に記された、小宮の「殊に満洲も朝鮮も日本の手から離れてしまつた今日、それは貴重なドキュメントとなつた筈だからである」という述懐には共感し難いが、漱石が暗に背負わされた戦争成果の報道という役割と期待とが察せられる一文である。

新聞における満州に関する積極的な報道は日露戦争の勃発と共に始まった。特に従軍による戦況報道では、各新聞社が特配員を派遣してしのぎを削りあう。また、戦争が終結した後は、満州を領土化したこともあり、『東京朝日新聞』では、一九〇八（明治四一）年十二月二十日の紙面改革により、二面に内外電報を掲載するようになる。以後満州に関する報道の多くはこの面に掲載された。漱石の紀行文が掲載される以前から、新聞読者はこれらの満州報道記事に既に触れていたのである。

日露戦争報道の特配員について『朝日新聞社史』⁹⁾では次のように記述されている。

〔…〕陸軍では従軍記者を一軍一社一人に制限した。そこで大新聞は、いずれも懇意な地方新聞にたのんで、その名を借りて出願する方法をとり、これは当局も黙認のかたちとなった。正式に許可をうけた第一陣として、大朝〔大阪朝日新聞〕から鳥居素川と小林童洲（万吉）が第一軍付として（明治三十七年）三月に出発、素川は五月半ばに帰社したが、東朝〔東京朝日新聞〕の小西南海（和）がその交代として以後第一軍についた。

第二軍、第三軍への従軍許可はさらにおくれ、七月下旬になって上野鞆鞆、弓削田秋江（清一）、（いずれも東朝）が第二軍に、半井桃水（東朝）、大村琴花（大朝）が第三軍へと同時に出発、〔…〕これらの特派員が配置につくまでの戦地からの報道は、戦前に現地にいた囑託通信員や軍関係者に依頼した。

陸上戦況の公報が正式に発表されたのは、第一軍が鴨緑江を渡河した三十七年五月一日からである。

有事においてジャーナリズムを活性化した戦局報道は、文学者としては既に日清戦争における国木田独歩の『愛弟通信』

〔『国民新聞』一八九四から九五年まで掲載〕があり、日露戦争においても新聞や雑誌をにぎわした。岡本綺堂（『東京日日新聞』）、国木田独步（『戦時画報』）、黒岩涙香（『萬朝報』）、田山花袋（博文館写真真班）、徳富蘇峰（『国民新聞』）らが各紙誌に筆を揮い、『東京朝日新聞』が派遣した従軍記者の中には半井桃水がいた。

桃水の従軍した陸軍の第三軍は一九〇四（明治37）年五月に編成され、指揮をしたのは大将・乃木希典である。第三軍は同年八月・十月・十一月の三回にわたって旅順総攻撃を行い、日露戦争のハイライトともいえる激戦を制して十二月五日に二〇三高地を占領した。桃水の記事はこれらの模様を伝えるものであった。¹⁰⁾

旅順の戦いがドラマチックに語り継がれた要因は、当地での戦死者の内に乃木の長男・勝典、次男・保典が含まれていることにある。一九〇四（明治37）年十二月十六日『東京朝日新聞』の記事「旅順戦で二児を失った乃木希典」でも、「乃木大将は旅順を得んがために既にその一家を犠牲に供したり」と書かれているが、桃水もまたこのことに触れた。同月二十日の「二百三高地を観る（続き）」には「〇〇司令部」の「吉田（清一か）將軍」の言葉として書かれた。

〔…〕乃木大将は、曩に南山の役、長子勝典氏を失はれた、当時將軍は夫人の許に父子三人戦死し盡した後、共に葬儀を営めと、申送られた、悲壯雄烈、為に国民は激励せられ、將軍あり、軍国の事また憂ふるに足らずと、信念を増したと同時に、將軍父子の健全を祈る一層切なるものを加へた、然るに二百三の激戦、友安將軍の副官として、勇猛に働いた乃木少尉は戦死された、即ち將軍の次子保典氏である、南山の役に長子を失ひ、今また二百三に於て、次子を失はれた將軍其心事を想像おもひやうでは、誰か流涕せぬ者があらう而も、〔不読〕家の存亡に属する、責任を負ふた乃木將軍眼中子なく自身もない、次子の計に接した大將は一点悲哀の状なくして、東西に奔走し、指揮督励せられたが、部下多数の死傷を語るや、忽ち潜然として涙下る、我〔不読〕如何なる言葉を以てしても、將軍に對する感謝の意を、言頭はす事は出来ぬのである。

乃木に国民のあるべき姿と犠牲を代表させることで占領が可能となった二〇三高地である。激戦によって、二〇三高地は単に戦略上に必要な場所であっただけでなく、記念碑になりうる場所となった。桃水は十九日「二百三高地を観る」の冒頭でまずその点に言及した。

松村〔務本か〕將軍は二百三高地に鉄血山の名を命じた、実に無数の鉄と血にて購ひ得たりと語られた、去九月十九日より四日間、先月廿六日来十日間に濺ぎかけた鉄幾何、血幾何、鉄血の名は誠に能く当嵌まる、今後世界の戦史に一大異彩を放つべき此山、日本敵国人民が末代までも決して忘るべからざる二百三高地、其山が我占領に帰するや否や、一日も早く登攀して忠勇義烈なる戦死者の英霊を弔はんとは我等が予ての希望であつた、

「松村將軍」から「鉄血山」を拝命した二〇三高地であつたが、実際には「爾靈山²」の名が一般化した。命名したのは乃木希典。乃木が十二月十日の日記に書きつけたという七言絶句「爾靈山」がもととなつた。この漢詩で「鉄血」は、転句に「鉄血覆山山形改」と詠み込まれている。日露戦争が終わると旅順では、一九〇六（明治39）年三月に乃木と東郷平八郎の陸海軍両大将が発起人となり、白玉山に表忠塔が建立（一九〇七年完成）され、二〇三高地にも記念碑が建てられた（一九一三年完成）。当時の絵はがきには、忠魂塔や、記念碑の写真と共に乃木の「爾靈山」が刷り込まれたものもあつた。ここでようやく漱石に戻ることとする。戦争の記憶が生々しい旅順の地が『滿韓ところどころ』で描かれるのは、「二十二」から「二十五」までの四回である。「二十三」（11月23日）は次のように書き出される。

旅順に着いた時汽車の窓から首を出したら、つい鼻の先の山に、円柱の様な高い塔が見えた。それが餘り高過ぎるので、肩から先を前の方へ突き出して、窮屈に仰向かなくては頂点^{てんてん}迄見上げる訳には行かなかつた。

後段で「これが白玉山で、あの上の高い塔が戦勝記念碑だと説明」してもらって漸く明かされるのだが、新聞の読者には「円柱の様な高い塔」といわれただけでもう正体はわかっていたはずだ。漱石が旅行していた九月ならばまだしも、『満韓とどこどこ』が連載されていたこの時期、旅順には関心が集まっていた。特に白玉山の表忠塔はその中心である。二年がかりで完成した表忠塔の竣工式が十月に行われ、来たる十一月二十八日には弔魂祭に合わせて除幕式が催されるのである。

一九〇九（明治42）年七月以降の『東京朝日新聞』から、表忠塔に関する記事を拾ってみる。

- ・七月二十一日「旅順表忠塔工事」（朝刊三面）
- ・八月十一日「白玉山⁽⁷⁾ 彰⁽⁷⁾ 忠塔進捗」（朝刊二面）
- ・八月十二日「白玉山⁽⁷⁾ 彰⁽⁷⁾ 忠塔進捗」（朝刊二面）
- ・十月七日「表忠塔竣工式」（朝刊二面）
- ・十月十日「旅順の表忠塔」（朝刊四面）
- ・十月二十六日「伏見宮旅順行」（朝刊二面）
- ・十一月十二日「両宮御渡満」（朝刊二面）
- ・十一月二十三日「満韓とどこどこ⁽²¹³⁾」（朝刊三面）
- ・十一月二十五日「東郷大将」（朝刊二面）
- ・十一月二十八日「旅順の表忠塔」（朝刊二面）
- ・十一月二十八日「乃木大将の感想」、「旅順の表忠塔」⁽²⁾ ※写真（朝刊三面）
- ・十一月二十八日「嗚呼忠魂碑 島村中将談」（朝刊六面）
- ・十一月三十日「弔魂祭」、「表忠塔除幕式」、「乃木大将夫人」、「旅順の大宴会」（朝刊二面）

・十二月十三日「旅順四日」(朝刊八面)

網掛けにしたのが、先に引用した『滿韓ところどころ』である。皇族から平民までが表忠塔の方を向いているというのに、一人「余」だけは「高い塔」をみてもピンとこない。「二」(10月21日)にみた諸諺がここにも發揮され、「余」の無知を印象付ける書きぶりである。方や半井桃水は、同じ『東京朝日新聞』に「旅順方面戦死者の亡魂」と題して、冥界の言葉をもって表忠塔建設の主意を穿ち、「畢竟空前の犠牲を払ひ、非常の難戦苦闘を経て敵の手から〔不読〕取つた旅順口である事を子々孫々迄伝へて、一種不言の訓戒を与へたいとの真意もあらう」と説いている。戦争を見て来た桃水からすれば「子々孫々迄」記憶せねばならぬという旅順の犠牲を、もう既に忘れてしまったかのような不心得者の「余」は崇られかねない。

「二十四」(11月30日)では二〇三高地と鶏冠山に触れるが、悪路と馬車の話題に終始して、「二百三高地へ行く途中などでは、とう／＼此火打石に降参して、馬車から下りて仕舞つた。さうして痛い腹を抱えながら、膏油あぶらごになつて歩いた位である」と書く。二〇三高地をめぐる攻防を矮小化してなぞり、腹痛を抱えた「余」の行軍こそ描かれるものの、戦場への兵どもが夢の跡あとの感想はなく、相変わらずトボケている。しかし、旅順では表忠塔がお披露目されたところであつた。『滿韓ところどころ』(「二十四」)の掲載されている三面から目を転じて、見開きの右にあたる二面の「滿洲特電」を見れば、二十八日に行われた白玉山での弔魂祭の様子が三段に渡つて報じられている。

伏見宮殿下御親筆の『表忠塔』の金文字燦として表はれ一同之に敬礼す (「表忠塔除幕式」)

乃木東郷両大将は〔…〕有繁に感慨に堪へず時折頭を垂れて沈思し居たり各遺族は何れも〔…〕戦死者の偉烈を忍び兼ねては今日の盛典に参列したるを名譽とし悲喜交々至るの有様〔…〕遺族総代と云ふべき乃木大将夫人の身の上を思ひては参列者何れも同情の涙を湛ぎ旅順の秋の哀は今日一入深く覚えたり (同)

三面とは打って変わって厳かで、日露戦争以来の激情的な語が並ぶ。第一に、敬礼する軍人と、「窮屈に仰向」いた「余」とでは、塔を見る姿勢が違う。極めつけは乃木夫人の談話である。

夫人は久しく心に懸りし旅順を見二百三高地にも登りたれば最早心に懸ることなしと語り（「乃木大將夫人」）

このように、同じ日の『東京朝日新聞』に掲載された二つの二〇三高地登頂の感想は、同じ場所とは思えないほどの違いがある。約八万四千人に上る戦死者の遺族を代表した乃木夫人に対して、ごろた石に悩まされたと書く「余」の道化振りは異様なコントラストを生じさせる。

戦争遺跡らしい話はようやく「二十五」（12月1日）に出てくるが、派手な白兵戦ではなく、作戦的には重要かもしれないが地味な坑道掘りである。そのうえ記された感想は「軍人は勇ましい」といったような期待された文言はまたしてもなく、「軍人の根気の好いのに悉く敬服した」という的外れなものであった。

4

先にも開いた『南滿州鉄道案内』の奥付を見ると、一九〇九（明治42）年十二月二十二日に印刷とある。この案内には、二〇三高地（乃木の「爾靈山」も添えられている）はもちろん、先ごろお披露目されたばかりの表忠塔も載っている。

駅の背後海拔三百余尺の白玉山頭に建設せらる、四十年起工し四十二年十一月二十八日 伏見宮殿下の台臨を仰ぎ盛大なる竣功式を行へり、総長二百十八尺嶄然として天に冲す忠勇なる我海陸軍陣歿者の名譽は炳として日月と共に輝

挿入された写真は「工事中の白玉山表忠塔」で、他とくらべると紹介文も短く、実際の竣工式よりも前に書かれたものと思われる⁽¹⁶⁾。この年完成したばかりの表忠塔は、記憶に新しい激戦地・旅順のモニメントとして建てられ、「内地」の新聞以外でも地誌や旅行案内等にも採り上げられた。満鉄としては、観光資源としてこれを利用しない手はなく、漱石を案内したのもうなずける。しかし、旅順で宿泊した満鉄経営の大和ホテルを、「ホテルの中には一人も客がゐない様に見える。ホテルの外にも一切人が住んでゐる様には思はれない」(二十二)と書くような『満韓ところどころ』の描写が、満鉄の期待に沿うものであったか否かについては、大いに疑問が残る。表忠塔ひとつとっても、『南滿州鉄道案内』における紹介文と『満韓ところどころ』の記述とでは、全くといって良いほど重なるところがない。

どうやら先に引用した、「満鉄の事業や何かの紹介をやらせようといふことでもあつたものと見えます。しかし自分では別に提灯持ちをする気はなかつたであります」という鏡子の観察は当を得ているようだ。しかしそれだけではなく、満鉄の向こうには、乃木・表忠塔をめぐる言説が見えてきた。『東京朝日新聞』では、桃水と漱石とでは満州に対する姿勢は比較にならないほど異なり、掲載時においては式典なんぞ素知らぬ風をつらぬいた。滑稽に描かれた「余」の引き立て役は、同じメディアで脚光を浴びた日露戦争と軍人の像ではあるまいか。

『満韓ところどころ』と『東京朝日新聞』の記事とを見比べた。これまで『満韓ところどころ』は、単行本『四篇』や全集をもとに言及される傾向にあり、同時代の新聞記事への注意はあまり払われてこなかった。「円柱の様な高い塔」「戦勝記念碑」(二二三)や「二百三高地」(二四四)への言及や註釈⁽¹⁸⁾をみても、『満韓ところどころ』と表忠塔の記事が紙面に並んでいたことを指摘したものではなかった。今回は各章を独立したものとみたため旅順への指摘のみに留まるが、新聞記事についてはさらなる調査が必要であろう。漱石の書きぶりからは、『東京朝日新聞』で『満韓ところどころ』と他の記事と

を相互に参照する読者の姿が浮かび上がる。作中の「余」に諧謔的なポーズをとらせる漱石はしかし、『滿韓ところどころ』を異色の旅順紀行として書き進めていたのである。

凡例

- ・『滿韓ところどころ』の章番号に付した丸括弧内は、『東京朝日新聞』掲載日を示す。また、引用は『東京朝日新聞』に依った。
- ・和暦を併記する際にはアラビア数字を用いた。
- ・引用部中の漢字は基本的に常用字体に改め、歴史的仮名遣いはそのままとした。ルビは、難読と思われるものを除き外した。傍点は残した。
- ・引用部中の「」内は、引用者による補足であり、「…」は省略を、「／」は改行を示す。

註

- (1) ゆまに書房HP (<http://www.yumani.co.jp/isbn/4897147409>) 二〇一〇年十一月十九日閲覧
- (2) 夏目鏡子「滿韓旅行」(『漱石の思ひ出』岩波書店、一九二九年十月)
- (3) 加藤聖文「国策会社滿鉄の誕生」(『滿鉄全史』講談社、二〇〇六年十一月)
- (4) 原田勝正「滿鉄誕生」(『滿鉄』岩波新書、一九八一年十二月)
- (5) 『日本の広報・PR百年』同友社、二〇一二年三月
- (6) 『外地・植民地の鉄道旅行案内書』(『近代日本の旅行案内図録』創元社、二〇一八年五月)
- (7) 『外地・植民地の鉄道旅行案内書』(『近代日本の旅行案内図録』前掲)
- (8) 小宮豊隆「解説」(『漱石全集』十六、縮刷版、岩波書店、一九五六年十二月)
- (9) 『日露戦争で特派員の活躍』(『朝日新聞社史』明治篇、朝日新聞社、一九九〇年七月)
- (10) ただし、井上佑子が「日露戦争とジャーナリズム」(『日露戦争と写真報道』吉川弘文館、二〇一二年七月)で桃水引用しながら述べているように、「戦局が不利であった第三軍では取締りが厳し」かった。要塞戦の報道は禁じられ、検閲が厳しく、

軍隊や将校の名を明記することは出来なかった。

(11) 漱石の日記「日記五」明治四二年九月十日(『漱石全集』二十、岩波書店、一九九六年七月)では、「新市街は廃墟の感あり。宿の前にて虫しきりに鳴く。港は暗緑にて鏡の如し。古戦場の山を望む。岡の上に半工事の家処々に立つ。草が立派に切り開いた道の pavement の上に立つ。森閑たり。／旅順の記念碑を汽車中より望む。二百何尺の高さなり。此二十三日東郷大将来。」と記されている。

(12) 「二〇三高地絶頂戦跡記念標」、「旅順の納骨祠(白玉神社)」の写真も掲載されている。

(13) 「我々旅順の戦死者が、(…)我々ばかり立派な忠魂碑の下に、祭つて貰ひたいと思はぬ、乃木東郷の両閣下も、強ち其部下の爲め壮大の碑を建て忠魂義胆を弔はうと願はるゝのみではあるまい、畢竟空前の犠牲を払ひ、非常の難戦苦闘を経て敵の手から「不説」取つた旅順口である事を子々孫々迄伝へて、一種不言の訓戒を与へたいとの真意もあらう」(『東京朝日新聞』一九〇六(明治39)年十二月三日朝刊八面)

(14) 『国史大辞典』(十一、吉川弘文館、一九九〇年九月)

(15) 例えば表忠塔の次に紹介された「露国軍人忠魂碑」では、「明治四十一年六月十日之が除幕式を行へり、我皇特に乃木大将を派して之に参せしめ露帝亦深く日本の義拳に感じ、ゲルングロス中将を特派して式典に参列せしめ、「スラヴ」の毅魂は今や晏然として此に千秋の眠に就けり」などと書かれている。

(16) 一九二六年版の『南滿州鉄道案内』では、割かれた紙幅も増え、表忠塔の除幕式の模様も、「四十二年十一月竣工式を挙行し其式日は伏見宮殿下を始め奉り東郷乃木両大将の臨場を請ひ旅順あつて以来殆んど空前なる儀式を挙げたり」と記述されている。

(17) 『四篇』(春陽堂、一九一〇年五月)収録時に「戦勝記念碑」から「表忠塔」に書き換えられた。『満韓ところごとく』(春陽堂、一九一五年八月)もこれに準ずる。

(18) 『漱石全集』(八、岩波書店、一九六六年七月)、『漱石文学全集』(十、集英社、一九七三年四月)、『夏目漱石全集』(七、角川書店、一九七四年七月)、『漱石全集』(十二、岩波書店、一九九四年十二月)、原武哲「夏目漱石「満韓ところごとく」新注解」(『叙説』花書院、二〇〇六年一月号)、『漱石紀行文集』(岩波書店、二〇一六年七月)、『定本 漱石全集』(十二、岩波書店、

二〇一七年九月、劉靜華「漱石が見た日露戦跡を訪ねて」(『Kumamoto 総合文化雑誌』熊本文化振興会、二〇一九年三月号)、劉靜華「旅順体験における漱石の戦勝意識考」(西槿俤・坂元昌樹編『夏目漱石の見た中国』集広舎、二〇一九年三月)、原武哲『夏目漱石の中国紀行』(鳥影社、二〇二〇年十月)などを参照した。右の内、原武哲「夏目漱石「満韓ところぐ」」新注解(原武哲)と『漱石紀行文集』(藤井淑禎)が表忠塔の竣工式に触れている。なお、『満韓ところぐ』は『漱石文学全注釈』(若草書房)には収録されていない。